

**An Email From Robert Aitken,Rodaishi to Stuart Lachs.**

**Dated:09/07/06**

ロバート エイトケン 老大師より スチュアート ラクス へのEメール。

古佛

以下が、エイトケンの私の質問に対するEメールによる返事です。日付は2006年9月7日、これに続いて、2006年9月13日の、私の質問の答えと共に、大菩薩禅堂会館儀式の項に間違いがあると思われるため、これを引用しないようにとの言及もありました。

前の手紙で二三の秘密事項と共にお話した事ですが、1976年、大菩薩禅堂開館儀式に関する事で、少々過失があったことを彼らは指摘しました。この過失とは、私の報告とは関係のない事なので、この文章をそのまま引用しないようお願いいたします。

原書

ロバート エイトケンより

スチュアート ラクス宛

2006年9月7日木曜日、午後3時59分

首題： RBAの手紙

親愛なるスチュアート

私は貴方のAARへの発表が、事実正確である事を望み、援助したいので、島野に関する記憶を出来るだけ正確に思い出そうと試みています。私は89歳になり、殆ど車椅子に縛られてホノルルの療養所で暮らしています。私の記憶は明瞭なのですが、名前等の細部に関しては、一部不明瞭な所もあると思います。以下は秘書のカロライン グラスに口述したものです。

1958年、アンと私は龍沢寺を訪れました。これはアンにとって二度目の訪問でした。宗淵老師や、他の昔の友人達との再会に引き続いて、私達は島野タイ栄道に会いました。彼は自己紹介して、自分はアメリカへ移民して、千崎如幻のように骨をアメリカに埋めたい、援助して欲しいといたしました。彼の決意に私達は感動して、出来るだけの事をやってみようと、約束しました。長い経緯を一言に言えば、私達は1960年の夏、彼をハワイへ呼ぶ事に成功したのです。彼はここの庵禅堂内に私達と共に住む事になりました。アンと私は建物の後部のベッドルームに、彼は表側のベッドルームに落ち着きました。1959年秋、宗淵老師の賛成を得てダイヤモンド僧伽の創立が成りました。島野栄道を新しい指導者として、小さなグループを紹介しました。初めから彼の態度は対抗的で、まもなくこの小さなグループは、新しい指導者に付く側と、従来通り私に付く側とに分かれてしまいました。言うまでもなく、これは非常に困難な結果を招くことになりましたが、私達は我慢して、彼をハワイ大学の語学、文学の教室へ通わせることにしました。彼は彼のグループ内で様々な変革を試みました。

私達は禅堂を便利な場所へ移動し、宗淵老師を招いて接心を行いました。私はタイさんに関する失望を、老師に打ち明けたのですが、老師は同情の風は見えるのですが、それ以上なにも変化は見えませんでした。私達はさらに二年我慢を続け、その間、二人のメンバーが精神衰弱に倒れました。

私は事の起こりに驚き、クイーンズ メディカル センターの精神科医院長に相談しました。彼は私にボランティアとしてメディカル センターの精神科へ来るように勧め、職員会議に参加させてくれる事を約束しました。私は医師の勧めに従ったのですが、これが非常に有意義な仕事だと思われたので、タイさんにも勧め、彼も私について参加しました。彼も意欲的で二度程接心も行いました。

間もなく、このプログラムを私達に勧めた精神科医院長が私を呼んで、この病棟の看護婦長が、新しいボランティア（タイさん）が、二人の女性が精神衰弱に陥った主要原因である事を目撃、報告したというのです。彼女は、タイさんが女性を餌食にするために、ボランティア活動を行っている、と見定めていました。私は非常に驚き、すぐに調査を行いました。確かにタイさんが関係しているのです。私は絶対に疑う余地のない証拠書類をまとめ、日本へ行き宗淵老師に相談を求めました。（タイさんへは米国本土の両親に会いに行くと言っておきました。）

宗淵老師は注意深く聞いてくれましたが、私の感じではこの事件をあまり重要視しておられないように見えました。安谷老師はこの時、休暇中で近辺へ出かけておられ留守だったので、二人で彼のもとへ相談に行ったのですが、彼の関心は宗淵老師以下で、タイさんは二度と病院へ行かなければ良いであろう、と勧めるだけなのです。結局なんら成果なく私はホノルルへ帰ったのですが、タイさんは私の日本旅行を知り、両親に会いに行くなどと言って彼を騙したと、大いに憤慨し、二三日の中にニューヨークへ行くと言いました。

彼は去り、私はニューヨークの友人からその後の経緯を知らされました。察する所、島野は彼らのもとへ下って行ったようです。この時、アンは、すっかり神経をすり減らし、又、二人の神経衰弱患者を守るため、この事件一切から身を引くよう、黙殺するよう私に懇願しました。実の所、私としては、証拠書類を持って、INSへ赴き、タイさんの国外追放を計りたかったのですが、アンの反対があまりに激烈で、止むなく諦めて、私は二人のニューヨークの友人にのみ簡単に伝えるにとどめるという事で妥協したのでした。やがて、皆はこれらの経緯一切と和解して、島野の援助に動きだしたようです。この時、島野は日本から花嫁を呼び、一同は彼女を歓迎して迎える体制を整えました。皆は、花嫁の到着により、一切の問題は平穩に落ち着くと期待したのです。

12年前、アンは死の直前、私に打ち明けて、二人の女性患者を守るため、島野の事件から手を引くように迫った事を後悔しているといいました。ロバート エイトケン ⅡAR向けに話を公開する計画が持ち上がりました。アンはこの話を貴方に伝えたいと思います。女性の一人はロスアンゼルスへ移り、しばらく文通を続けましたが、彼女が今生きていのかどうか私にはわかりません。もう一人の女性は神経衰弱から立ち直れず、オアフへの途中にある家に長く住んでいましたが、彼女も多分、生きてはいないと思われ、私としてはこの話を心配する事無く、打ち明ける事が出来ます。

斯くして、タイさんはニューヨークでも、持って生まれた性情のまま生活し、結婚したにも関わらず、彼のセックス冒険談が私のもとへ届き始めました。1976年大菩薩禅堂の開館式に私は出席しました。古い龍沢寺時代の友人が出席するというので彼らに会いたくて私も出かける事にいたしました。

日本の山田老師のもとで共に接心に参加した、初めの頃の弟子の一人が老いた父親の近くで暮らすためニューヨークに落ち着きました。彼女は、大菩薩禅堂、ニューヨーク禅堂のメンバーになり、間もなくタイさんの愛人になりました。彼女は、彼の手口をかなり細目に渡って報告しています。察する所、彼はすでにこの頃、かなりの道楽者になっており、彼女は私の彼を教師としての立場を非難する側には参加しませんでした。

私達は、タイさんの弟子には時々あいます。以前私達の仲間であった一人が、現在ニューヨーク センターで指導的な地位にあります。彼は始めからやり直しをしなければならなかったにも関わらず、成功しています。私は、タイさんの元弟子達の成功を祈ります。

反島野の対決の過程において、私は自分の修行を危険に晒す可能性があったとは思いません。宗淵老師からも安谷老師からも発言はありませんでした。事件が落ち着いて後、考える事もあったのですが、私は追求を続けませんでした。

沢山話したい事があります。貴方の質問には何でも答えましょう。

ロバート エイトケン